

図書館だより

★ ストリーム ★



「実りの秋」「食欲の秋」「スポーツの秋」「芸術の秋」「読書の秋」「行楽の秋」 いろいろな「秋」の到来ですね。

みなさんの「秋」は何の秋でしょうか？ 秋の夕暮れは“つるべ落とし”と言われるように、あっという間に日が暮れます。本を開いて「読書の秋」楽しんでみてはいかがでしょうか？



『読書週間』

終戦間もない1947（昭和22）年、まだ戦火の傷痕が至るところに残っているなか「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」と11月17日から、第1回『読書週間』が開催されました。そのときの反響はすばらしく、翌年の第2回から10月27日～11月9日（文化の日を中心にした2週間）と定められ、日本の国民的行事として定着し、日本は世界有数の「本を読む国民の国」になりました。

2019 読書週間標語 「おかえり、葉の場所で待っているよ」

《標語作者のことば》日々の時間と環境は、時には私を置いて行ってしまうほど早く過ぎ去ってしまうときもあるけれど、ほっと開いた本の世界は、私の帰りを待ってから進んでくれる。

☆おすすめの一冊 『まなの本棚』 芦田愛菜

みなさんと同年代の芦田愛菜さん。小さい頃から本が大好きで、「ページに並んだ活字から自分の想像で物語の世界を作り上げていく楽しさ」や「自分とは違う誰かの人生や心の中を知ること」にすごく興味があったそうです。そんな愛菜さんが読んだ数多くの本の中から約100冊の本を、簡単なあらすじに感想を交え紹介してくれています。



☆今回も校長先生に読書体験を書いて頂きました。

読書にめざめた頃（3）

学校長 塚本 敏雄

前回、 中学校時代の先生にあこがれて、詩が好きになったという話をしました。では、どんな詩を読んでいたか、ということを今回は紹介したいと思います。

第二次世界大戦に敗れ、1945年（昭和20年）以降、日本は大きな変革の時期を迎えました。そして、それまで押さえつけられていたものが一気に噴き出すように、文化的にも新しいものが次々に生まれました。なにしろ、それまでは戦争一色で、反対意見を言うことさえできなかったのが、急に自由になったのですから、当然のことでしょう。若者たちにとっては、自分たちより上の世代は、その戦争の体制に従って自分たちを抑圧していた人たちです。文学の世界でも、新しい才能が次々に登場し、古い世代を圧倒していきました。

詩の世界では、当時「戦後詩人」と呼ばれる詩人たちが登場し、新しい詩は「戦後詩」とか「現代詩」と呼ばれました。さすがに、いつまで「戦後詩」という言い方をするのも変なので、「戦後詩」という言い方はいつしか使われなくなりましたが、今でも「現代詩」という言い方は広く使われています。

今でも有名な詩人である、中原中也とか宮沢賢治、萩原朔太郎は、戦前の世代に属します。

前回もちょっと名前を挙げた吉本隆明という、今は吉本ばななの父としても有名になった詩人は、戦後の世代に属します。いまとなってみれば、皆さんにとっては、中原中也も吉本隆明も古い人に見えるでしょうし、だったら、そんな区別なんて必要ないと思えるかもしれません。でも、その当時は、明確に「古い詩人」と「新しい詩人」の区別がありました

し、終戦から１５年ほど経った年に生まれた私にもその違いは明確に見えました。そういうことが、いわゆる「時代」ということになるのでしょう。

吉本隆明は、私よりも３５歳上の世代で、私の父より年上ですから、だいぶ上なのですが、それでも同時代に生きている感覚がありました。吉本は、のちに戦闘的な詩を書いて、いわゆる安保闘争、学生運動が盛んだった時代に人気でした。しかし、初期はとてもロマンチックな詩も書いていて、次にあげる詩は、ロマンチックな時代から戦闘的な詩へと移っていく時期の詩で、私は高校生時代に愛読しました。

涙が涸れる

けふから ぼくらは泣かない
きのふまでのように もう世界は
うつくしくもなくなったから そうして
針のやうなことばをあつめて 悲惨な
出来ごとを生活のなかからみつけ
つき刺す
ぼくらの生活があるかぎり 一本の針を
引出しからつかみだすように 心の底から
ひとつの倫理を つまり
役立ちうる武器をつかみだす
しめつばい貧民街の朽ちかかった軒先を
ひとりであるいは少女と
とほり過ぎるとき ぼくらは
残酷に ぼくらの武器を
かくしてゐる
胸のあひだからは 涙のかはりに
バラ色の私鉄の切符が
くちやくちやになつてあらはれ
ぼくらはぼくらに または少女に
それを視せて とほくまで
ゆくんだと告げるのである

とほくまでゆくんだ ぼくらの好きな人々よ
嫉みと嫉みとをからみ合わせても
窮迫したぼくらの生活からは 名高い
恋の物語はうまれない
ぼくらはきみによって
きみはぼくらによって ただ
屈辱を組織できるだけだ
それをしなければならぬ



分かりにくいところもありますが、「バラ色の私鉄の切符」のイメージや、繰り返される「とほくまでゆくんだ」というフレーズがとても魅力的で、私は、皆さんぐらいの年代のときに愛読していました。こうした言葉たちが心の中に積み重なって、思春期の自分を支えてくれたのだと思います。

（令和元年 取手二高「図書館だより」）